

日本産ナミコムカデ *Hanseniella caldaria* (Hansen, 1903) の分類学的研究

生田 将之 (筑波大学 生物学類)

指導教員：和田 洋 (筑波大学 生命環境系)

背景・目的

コムカデは、節足動物門多足亜門結合綱の土壌動物で、歩脚数と背板数が対応していないこと、尾部に1対の出糸突起を持っていることによって特徴づけられる。全世界に広く分布するとされ、14属およそ200種が記載されている。日本においては、Rochaix (1954) により、ナミコムカデ科のナミコムカデとミゾコムカデ、ヤサコムカデ科のヤサコムカデの計2科3属3種が分布するとされた。

しかし、日本産コムカデの分類には多数の問題点が挙げられる。唯一の研究である Rochaix (1954) では主にヨーロッパの既知種をもとに同定を行っており、それ以降分類学的研究が全く行われていない。また、原記載論文が古く、標徴形質の記述が曖昧であるばかりでなく、種内の変異についても殆ど言及されていない。さらに種の分布という基本的な事項でさえ、論文として殆ど公表されていない。

そこで、日本産のコムカデのうち、ナミコムカデ科のナミコムカデ *Hanseniella caldaria* (Hansen 1903) を対象として、同定の妥当性を評価し、これまで評価されていなかった形態的変異やそれらの分布を調べることで、日本産ナミコムカデの多様性を明らかにすることを目的に研究を行った。

材料・方法

日本各地で採集した *Hanseniella* 属のコムカデのうち、東北から九州までの27地点80個体を実体顕微鏡及び光学顕微鏡を用いて観察した。

観察は、まず現行の属分類の確認を行うため、属の表徴形質として、第2背板、第15背板の形状を観察した。次に、種の表徴形質として、出糸突起の形と棘数、触角の節数、触角第13節の棘、第1歩脚先端の爪、第12歩脚の爪及び付近の棘の計7形質を観察した。

結果・考察

属の同定を行った結果、第2背板の後縁が丸く、前側部の長い棘が斜め前に生える、第15背板の後縁に溝はないという特徴が今回観察した全ての個体で共通して見られた。これらの形質は *Hanseniella* 属の標徴形質であるので、全ての個体は本属に属すると判断した。

種分類については、今回調べた全ての個体は、第1歩脚の爪の形質状態がデンマークを基準産地とする *H. caldaria* とは異なり、むしろインドネシアを基準産地とする *H. orientalis* に類似していた。さらに、他の形質の組み合わせによって、3タイプが観察された。

各タイプの分布を調べたところ、単一のタイプのみ分布する産地と同所的に複数のタイプが分布する産地があった。単一タイプのみが分布する地点では、タイプ2またはタイプ3が確認されたが、タイプ1のみの産地は確認されなかった。

したがって、日本のナミコムカデの分類に関する Rochaix (1954) の見解については、再検討の必要性が強く示唆された。いずれにせよ、今回の結果は国内での *Hanseniella* 属は従来考えられていたよりも多様性があると考えられる。今後のさらなる検証のため、より多くの産地からのより多くの個体に対する形態観察と同時に、系統遺伝学的な分析が必要だと考えられる。

<分類学的な見解を含むため、詳細については当日発表する。>